

館山支部だより Vol.119

<支部連絡窓口>
千葉県隊友会館山支部
事務局(代表)川村 巖
〒294-0032 館山市笠名1357
Tel. 0470-22-0230



イチゴノキ
イチゴの実のような白い花が咲き
翌秋には朱色に染まる
<拙宅の庭先にて>

歲月人を待たず・光陰矢の如し、月日の経過は実に早いですね。令和5年もすでに師走を迎え、今年最後の支部だよりをお届けする時節になりました。東欧・中東ではウクライナに続いてパキスタンで新たな紛争が起きておりますが、一刻も早い収拾が望まれるところです。会員諸兄、ご家族皆様方の益々のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。年の瀬のご挨拶に代えさせていただきます。

<館山支部長 川村 巖>

支部の活動概要

<10・11月の活動実績>

- 10.10(火) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
- 10.11(水) 隊友会への入会説明会(館山航空基地)
- 10.14(土) 館山航空基地開隊70周年記念行事
- 11.28(火) 館山航空基地殉職隊員追悼式
- 12. 2(土) 11月支部役員会(コミセン)

<12・1月の活動予定>

- 1月上旬 21AW群司令への年頭表敬挨拶
- 1.27(土) 1月支部役員会(コミセン)

館山航空基地開隊70周年記念行事 10/14(土)

記念式典、祝賀飛行に続き、コロナ禍以来4年ぶりで催された茶話会スタイルの祝宴では地元名士、歴代群司令等約400名の来賓で賑わいました。なお、式典では行松第21航空群司令から「開隊以来の伝統の継承とさらなる発展のため共に励む」旨固い決意が述べられました。 <支部長>

トピックス 叙勲の榮譽に輝いた方々

<第41回危険業務従事者叙勲>

新井 務会員(海、館空基) 瑞宝双光章受章

<令和5年秋の叙勲>

榎本 祐三会員(海、121空司令) 瑞宝小授賞受章
野田喜美男会員(海、101空副長) 瑞宝双光章受章

晴れのご受章を心から祝福申し上げます。 <支部会員一同>

レクイエム

10/3 長谷川忠夫会員ご逝去(陸、享年81歳)

隊友会会員として長年のご理解ご協力有難うございました。謹んで哀悼の意を表し ご冥福をお祈り致します。 <会員一同>

令和6年度退職自衛官の求人情報(予定)

就業場所: 関東地区の陸自職種学校、補給処、駐屯地業務隊

千葉県の部隊としては、松戸、習志野、木更津、下志津駐屯地

業務内容: 事務・労務等部隊業務の支援

雇用条件: 給与(定年再就職時の平均給与相当)、社会保険完備

採用時期: 令和6年4月予定、雇用期間1年

まだ予定段階ですが、求人確定時にスムーズに応募できるよう事前に登録するようになっておりますので、関心のある方は支部事務局へ申出下さい。



<宮城の「海軍水源池」石柱>
側面には昭和6年7月竣工と刻まれている。通称「宮城の水源池」として知られているが、区の境界から言えば沼区に属する。

水源地の配水池(500トン)から館山基地へ直径90ミリの水道管で送水(電動ポンプ)していたことから当時の生活水の需要状況を推測できよう。 <筆者注>

時事雑感「パレスチナを巡る屈辱・軋轢の歴史と日本の過去・現在」

ウクライナ紛争を尻目に、このところ世界の関心がパレスチナ自治区ガザを巡るイスラエルとハマスの武力衝突に集まっている感があります。世界大戦後すでに78年経った現在、依然として後を絶つことがないよその国の紛争の報道に触れるにつけ、改めて戦後の日本の平和の尊さを実感する一方で、果してこのままでよいのだろうかという懐疑の念にかられてならないのです。時事評論家でもなんでもない、ひとりの老骨のツブヤキにしか聞こえないかもしれませんが考えるところを述べることにします。

パレスチナ紛争の長く根深い歴史

パレスチナを巡る武力紛争、どちらが正義で悪なのか、そんな単純な問題ではないと思うのです。この衝突の歴史を紐解いただけで実に長く根深いものがあることが分かります。19世紀末のユダヤ人のパレスチナへの移住に始まり、国連のパレスチナ分割決議、ユダヤ人によるイスラエル建国宣言に端を発した第一次～四次中東戦争・湾岸戦争等々、民族・宗教・政治・経済、他国の干渉さらに二大陣営の肩入れ等も絡み、イスラエル・パレスチナにとっては長くかつ根深い屈辱と軋轢の歴史であり、これらを無視して「話し合いで」とか「ナアナアマアア」では到底解決・収拾の糸口は見出せないと思うのです。

平和過ぎる？日本、平和を唱えていれば戦争は防げる？

悲惨な結果に終わった大東亜戦争、敗戦国の日本が(北方四島を除き、何の努力もなく)有史以来の姿(領土)をとどめることができたのはなぜなのでしょう。かたや日本の統治領であった朝鮮が南北に分断され、四年に及ぶ朝鮮動乱で多大の犠牲者を出しながらも、悲願の南北統一の夢を断たれ 対立をエスカレートさせているのは一体なぜなのでしょう。

世界を巻き込んだ第二次大戦後、すでに78年を経たにも関わらず世界のあちこちで戦争・紛争が絶えたことがないのです。この間、日本が他国から侵略されなかったのはなぜなのでしょう。日本が侵略を受けるに値しない国だからなのでしょう。

大東亜戦争の発端が、日清・日露戦争そして第一次大戦への参戦によって領土を拡張した我が国が、帝国主義、軍国主義の道を突き進んだ結果、というのはあまりにも単純、安易な見方・考え方だと思うのです。明治維新にまでさかのぼって「日清・日露戦争そして大東亜戦争がなぜ起こったのか、避けることができなかったのか、当時の国際情勢・国家関係の中でどのように対処すべきだったのか」といった突っ込んだ反省が欠落していると思うのです。さらに、占領下で制定・交付された日本国憲法を世界に類のない誇るべき平和憲法とし、世界遺産に登録すべき憲法と吹聴するに至ってはウヌボレが強すぎるのではないのでしょうか。それ以前に「日本が他国から侵略を受けることなく平和・安寧を維持できているのはなぜなのでしょう」という根本的な突っ込みが足りないと思うのです。有史以来一度も外敵に侵略されたことがないという長い日本の歴史からくるものでしょうかね。

「アツモノに懲りてナマスを吹く」ような愚・浅慮は何としてでも慎むべき、というのが私の終生変わらぬ持論・信条であります。皆さんはどのようにお考えでしょうか。 <匿名希望、86歳、海>

宮城・海軍水源池の建設と運用に関わる逸話

館山市が本格的な給水(水道)事業を始めたのは昭和47年で、利根川水系を水源とする広域水道事業の開拓によって市内全域に給水が可能になった。これに先立って終戦直後の昭和21年に館山海軍航空隊の水源池の設備をそのまま活用して宮城から西崎地区一帯に簡易水道事業が始められており、これが後の本格的な水道事業の走りと言っても良いであろう。この水源池は現在三好水道事業団が灌漑用水の予備水源として管理しているが、今ではこの建設の歴史はもとよりその存在すら人々の脳裏から消え去ろうとしている。

宮城水源池の建設と水源(貯水量)の問題

館山航空隊の開隊に際して、地下水(井戸)が唯一の生活用水源であった館山では、大世帯の安定的な給水を確保する上で水源池の建設は不可避の大事業であった。記録資料によれば水源池用地の取得について難航した様子が伺えるが、施設関係者の努力が実って建設用地(約37,000平米、関係地主91戸)の交渉が妥結し、4～6年度予算で着工されS6年7月に竣工、基地への給水が開始されている。※最大の懸案は水源の絶対量の問題で、この貯水池の計画貯水量が40,000トンそこそこで、決して十分とは言いがたかった。この対策として近くの「坊ヶ谷(ぼうがやつ)」の農業用水の溜め池(8,000トン)を買収して予備水源と確保したがこれが精一杯であった。

もう一つの問題は、給水開始が開隊の1年後になっているが、その間、定期的に横須賀から水船を回航してもらったのであろう。

部隊等の増勢に伴う「給水能力」の問題

戦争半ばの昭和18年に館山基地と県道を挟んで州ノ崎航空隊が開隊された。最盛時には1万5千名の隊員を抱えるマンモス部隊である。加えてこの時期、館山基地にはいくつかの外來航空隊が常駐し、基地は総勢2万名を超す大所帯に膨らんだであろうと考えられる。

必然的に生活水の問題が出てくる。水源地の貯水量もさることながら、「給水能力(同時に各部に給水できる量、水圧)」の問題である。それではこの問題をどのようにして解決したのであろうか。以前にも紹介したことがあるが、赤山と道路を挟んだ東側に標高80m位の小山(地元では「びわ山」とか)がある。この山頂付近に大きなコンクリ造りのプールがあり、これが何のため造られたのか、その用途、所属(持主)等については地元の人も知らない。目測で優に2,000トン以上の容量(貯水量)があり、狭隘な山頂に難工事を冒してまで建設した理由等、謎に包まれているが、紙面スペースの関係上、ここでは結論のみについて述べることにする。

このプールは、州ノ空が管理していた配水池(浄化済の水を貯える水槽)で、次のような給水形態を考えたものと推測される。

※水源池の配水池からの(館山基地への)給水(電動ポンプ)と平行して、山頂から標高差(水頭、ヘッド)を利用して(州ノ空へ)給水する。これは給水能力の問題とともに、想定される空襲による停電時の対策として講じられたもので、停電時にはバルブ操作によってこの山頂配水池から館山基地に対する給水をも可能にしたものと考えられ、施設関係者の知恵・工夫努力の跡を伺うことができよう。

なお、州ノ空が終戦時米軍に提出した「軍需品等引渡目録」(防研保管資料)の中には、沼の配水池に関して「連合軍(米軍)に対して給水中、1,600トン/日」の記述があり、この推測を裏付けるものと言えよう。 <自称地域史探索マニア その42>